
特集 人が大地に刻むもの——地域生態史の試み

地域生態史の視点

A Perspective of Regional Eco-history

阿部 健一*

ABE Ken-ichi

キーワード：地域生態史，生態学，地域研究，地球環境問題，泥炭湿地林

KEY WORDS: regional eco-history, ecological approach, area study, environmental issues, globalization

Environmental problems, such as ozone depletion, global warming and acid rain, have been considered to be global issues to be solved under the international consensus and global cooperations. Interdisciplinary collaboration of related academic fields has also been regarded to be an inevitable approach to the issues.

Great emphasis on global aspect of environmental issues, however, may confuse us in recognizing the true essence of the problems. The fact that environmental problems, either global warming or acid rain, affect more than one country or region makes us regard such problems as global in nature. When we search for their causes, however, it becomes clear that each case presents different challenges and characteristics. It is such regional nature that makes environmental problems the object of area studies.

“Global” environmental problems are, in fact, vernacular problems to be solved firstly within that certain area which has indigenous history of interaction of nature and man. While environmental problems pose contemporary challenges, their root causes can be traced back to earlier times. The lack in such historical knowledge sometimes prevents us from understanding what truly is in question today.

Instead of interdisciplinary approaches which have turned out to be incompetent, the eco-historical approach is claimed to be the initial, necessary attempt to settle problems.

* 地域研究企画交流センター助手 Assistant Professor, JCAS

はじめに

地域研究が、その新たに構築された知の枠組みの中で取り扱う課題の一つに、環境問題がある。民族問題、都市問題、人口問題などと同じく、既存の学問分野では対処しきれない「現代の問題群」と呼ばれる問題である。

環境問題は、地球温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨といった顕在化した個々の問題の様態が示すように、国家、地域の境界を越えた地球規模の問題とされる。解決にあたっては、地域単位で対処することよりも、グローバルな視点と国際的な協力体制が強調される。

しかしながら、実は、環境問題は、その原因と責任がそれぞれの「地域」に求められるべき「地域の問題」である。地球規模の問題とすることは、責任の不当で巧みな分散にすぎない。問題の源は、それぞれの地域で生態的秩序を無視した、ゆがんだ近代化を進めたことにある。地域により固有の歴史的過程をへて今日のそれぞれの「環境問題」に行きついでいるのである。グローバルなアプローチを掲げ、世界的な解決策を図ることは、環境問題の持つ本質を見逃すことになる。

環境問題は地域に「固有」で「歴史的」問題である。問題の所在を地域の生態的過去に探る視点が必要となる。地域の生態史が、未来の自然と人間のあるべき姿を模索するために、今、期待されるのである。

I. 自然科学者の地域研究

地域研究には、どこか自分と地域の関わりを語らしめるところがある。なぜ、どのような経緯で地域研究に携わるようになったのか、他の学問分野では要求されることのないある種の告白を強いてくる。それが、地域研究のいかなる属性あるいは成立の背景にあるのか、思うところがないわけではないが、ここでは、場違いな地域研究論を行うよりも、この地域研究の「私」性といえるものによりかかる形で、本特集の意図するところを述べることにしたい。「地域生態史」と表明した一つの学問領域がどのような目的意識をもち、何を期待しているのか論及するのだが、自然科学、とくに本特集に関連の深い生態学を修めてきた者が、地域研究者として地域に関わった時の視座あるいはスタンスについてどこかでまず言及しておきたいのだ。

そのために、地域研究論は避けたいといいながら、いますこし、地域研究と自然科学の関連に触れておこうと思う*1。

地域研究を標榜する研究者のなかで、自然科学をベースとする研究者はきわめて少数である。それは、自然科学の成果が、地域研究にとって大きな意味を持たないからではない。

*1 地域研究とディシプリンの関係や方法論をめぐる議論には食傷している。今必要なのは、地域研究の「作品」といえるすぐれた論文を書くことと痛感しているが、自然科学からのこの種の発言は実のところほとんどなされていない。

自然環境は、地域の生業構造を大まかに決定する。そのため、自然科学、とくに生態学・地質学や自然に基づく応用科学である農林水産学の地域研究に関わることは決して小さくない。また自然環境の把握は地域理解の第一歩ともいえる作業である。ある地域の概説書の第一章は、地域の自然環境や生業に割かれるのが定番である。さらに、自然環境あるいは風土とも言うべきものが呈する地域性は、その地域の社会・経済・文化のシステムにまで影響を及ぼし地域の外枠を決定するとも考えられる。自然環境の理解は、たんなる地域の導入的概括以上のものがある。

にもかかわらず、自然科学者が地域研究に立ち入るのを躊躇する理由は、自然科学の持つ研究の方向性にある。普遍性を追求する自然科学と固有性・独自性に固執する地域研究との違いである。

個別性よりも普遍的理論を追求する学問としての生態学の方向性については、「島の生物地理学」や「r-K 淘汰理論」で知られる R. マッカーサーの『地理生態学』に端的に示されている。

マッカーサーによれば、複雑な生態系を対象とする生態学においては、自然界の一見無秩序と思える現象の中から、繰り返し現れるパターンを見つけ出し、それを抽象化、モデル化し、規則性を求めることが中心作業であり基本概念である。「科学の研究は単に事実を集積してゆくことではなく、繰り返し現れるパターンを探し求めること」であり、「科学はその諸原理において一般性を持つべきものである」とされる [マッカーサー 1982: 17]。生態学では、別の地域との比較で、ある地域に固有の現象は大きな意味をもたず、生態学者の関心を引きつけるのは、共通して反復して現れる現象のみとなる。

この点、自然科学とりわけ生態学は社会科学の中の経済学と共通するものがあるように思われる。生態学 (Oecologie) と経済学 (Oeconomics) は、ともに家を意味するギリシア語のオイコスに由来する述語であるが、語源的共通性以上に、その思考の方向と準拠する地平には相似なものがある。経済学が「地域研究への疎遠性を内在するディシプリン」 [原 1995: 2] とされるのも自然科学に通ずる普遍性と近代合理主義への傾斜にある。

さらに方法として分析、還元主義を採用する自然科学と、総合的、ホリスティックな理解を目指す地域研究との違いも重要な意味をもつ。しかしながら、方法論、目的へのアプローチの仕方については、たとえば生態学においては、生物をめぐる還元主義と全体主義の二つの方法論をめぐる論争が、すでに1960年代から断続的に繰り返し行われていることから明らかなように、自然科学を地域研究から隔てる決定的な要因とはならないようだ。還元主義と全体主義、分析と総合の対峙は、どの学問体系の中でも、磁石の両極のように、内在し、機能するものと思える。そして、研究のアプローチがどちらに重点がおかれるのかは、そのときどきの研究対象と研究が要請されるものによって、振り子のように揺れるものだろう。

ともあれ、自然科学者が、決定的ともいえる学問上の隔たりを超え地域研究に参画する契機についてのべておく。既存のディシプリンの範囲の中で、ディシプリンを逸脱するこ

となく、地域を材料とし、地域を道具として利用することも可能な人文・社会科学研究者とはどこか違う心構えについてである。

個人的にさまざまな機縁はあると思う。が、共通するのは、多くの研究者が調査対象である自然、生態、風土の急激な変貌を現場で目の当たりにしている点である。生態的に無分別な開発、環境への配慮を欠いた将来計画に強い危機感をもつことである。

地域研究になんらかの関心をよせる研究者は、実験科学でなく、生態学を初め野外科学を行っている研究者である。例外はないと思う。それぞれの研究者が自分自身の「フィールド」、調査の場をもっている。そしてその調査の場を通して、この環境の急激でとにかえしのつかない変化を身近に感じ取り、環境の変化がもたらす不安と危機感を地域の人々と共有することになる。

自然環境に焦点をあてる自然科学者には、この危機感は、とくに痛切なものとなる。対象が動物であろうが、植物・森林、あるいは生態系そのものであろうが、さらには人と自然とのかかわり、つまり広く「生業」一般であろうが、今日の環境の変化には目を覆いたくなる。環境問題は看過できない問題である。そしてひとたび環境問題に関与すれば、自然科学の持つ接近法では、問題解決へ遠いことにほどなく気づく。

川喜田をここで引用しておこう*2。環境問題の解決策を念頭に置いたとき、「すでに体系づけられたいかなる学問分野をもってきても、その応用として“その環境問題”に対処するのは、的外れ」とした上で、「“その環境問題”はまったくそれ自体として独自だという半面をもつものである。だから独自性を処理する科学的方法を柱としないで、分析と普遍妥当性を謳う方法を柱とするのは、見当外れたらざるをえない」[川喜田 1996: 582-583] としている。

そして、既存の学問にない「独自性と総合性の科学的処理」を研究の方向性に掲げた学問領域として、地域研究がある。ぬきさしならぬ問題を突きつけられ、手持ちの接近法ではその解決に至らないと了解すれば、あえてその学問分野だけにとどまる必要はない。自然科学者が地域研究に踏みいるきっかけは、臨地研究の中で地域の人々と共有することになった怒りにも似た問題意識が一つにある。

とはいえ、地域研究がこと環境問題にどのような枠組みを設定し、解決への糸口をつかめるのだろうか。地域研究が環境問題へ切り込む「資格」といえるものについて、次に述べたいと思う。

II. 環境問題と地域研究

奇妙なことだが、民族・技術・情報・観念が地域の枠組みを越え世界中隈なく浸透し、

*2 川喜田はその著作集の第2巻に『地域の生態史』という題をつけ、地域の生態史の重要性を唱導している。「地域生態史」というのはまだ馴染みのない述語であるが、その意図するところは所収の論文「環境と文化」に述べられている。共感するところが多い。

近代の一つの帰結としてグローバル化が進行する今日、「地域」についての関心は逆に増しているように思える。「普遍性」という光があたり、それぞれの「地域」が濃い影を生じ、その存在を顕にしているかのようである。あるいは「グローバリゼーション」という波のなかで、かつて自明のものとされていた地域の固有の存立意義を主張しはじめたかのようである。あえて意識することのなかった「地域」が今日ほど注目されている時代はない。

「地域研究」に対する近年の関心も基本的に同じ背景にたつと思われる。そこには地域研究が学問として成立するにあたっての今一つ別の背景がある。環境問題もそうだが、ほかに都市問題、民族問題などの今日的・世界的問題の奔出である。顕在化して久しいこれらの現代の世界的問題群に対し、既存の学問がそれぞれの研究領域にとどまる限り解決できないのはすでに明らかになっている。学際的という言葉がひところ問題解決の必要十分な接近法と考えられたが、今やそれは逃げ口上にすぎないように思える。現代の問題群解決にあたっては、たとえば「人文科学、社会科学、自然科学の緊密な学際的研究が必要である」と言い置いてそれぞれのディシプリンの枠中で研究に向かうだけでなく、積極的に既存の研究領域を横断し統合する新たな知の体系を求める姿勢が必要となっている。

環境問題は、そのような「現代の問題群」のひとつとして地域研究が真っ向から取り組むべき課題の一つであると思われる。また、この問題こそ、先に述べたように、自然、生態に関心をもつ研究者にとって、避けて通ることのできない課題である。

環境問題において、生態学が問題解決の中心となるディシプリンであるのは間違いない。生物学の中で、生物あるいは生物群と環境の関係に焦点をあてたのが生態学だからである。エコロジーの名付け親であるエルンスト・ヘッケルは、生態学という学問は「有機体とその環境の間の諸関係の科学」としている。1866年のことである。環境をより厳密に、ある特定の生物単位に与えるすべての物理的・生物的要因の総合と定義すれば、生態学は「生物と、生物に影響を与えあるいは逆に影響される物理的・生物的要因の総和との総合関係の研究」ということになる。述語としての生態学（エコロジー）がそのまま科学から環境運動のイデオロギーへと自然に転用されたのも、生態学が生来的に環境との関連を研究する最初の科学であったためであろう。

ただ生態学が生物学の一分野に留まるかぎり問題解決はおぼつかないことは明白である。生態学を中心とした学際的研究も、有効な解決手段を提示できるとは言いがたい。1990年に横浜で開催された国際生態学会の環境問題に対するアジェンダでも、常套句である学際的研究の必要性が唱えられている。しかし必要なのは、先に述べたように、学際性への過度な期待でなく、既存の学問の枠組みを越え、新たな知の体系を再構築することである。

とはいえ、環境問題を地域研究の課題とすること、言い換えれば環境問題への取り組みに「地域」という枠を設定することは、一見すると問題の核心からはずれているようにみえる。環境問題が、地域の問題ではなく、地球規模のまさにグローバルな課題と一般に理解されているからである。

ところが実際は、環境問題は、きわめて深く地域に関わっている問題である。というよ

りもむしろ地域への配慮がなければ解決のおぼつかない課題なのである*3。

たとえば、CO₂ 排出規制が結局のところ地域への割り当てという形で制度化されるように、世界規模の問題も地域へと還元されなければ解決への実行力をもたない。そして個々の地域は、共通の課題に直面しながら、その対処にあたって地域固有の問題を抱えるのである。環境問題は決して一つではない。世界のさまざまな地域でそれぞれ異なった経過と様相をもつそれぞれの環境問題がある。

このことは、環境問題においてグローバルな視点、全世界的な協力体制づくりが叫ばれる中で、逆に強調しておきたいところである。グローバルな視点や協力体制が必要となるのは、一つ一つの地域で環境問題への適切な取り組みがなされて後のことである。

国際環境協定は、世界が一つの共同体として「地球」環境問題に対処しようとする姿勢を具体化するものであろう。その大部分が、ストックホルム国連人間環境会議（1972年）以降締結されている。しかし「国際」協定でありながら、ほとんどすべてのこの種の協定、条約に、「地域住民の利益」を考慮した条項が盛り込まれることになっている。環境問題に関しては、「地域」をないがしろにした国際協定は、なんら効力をもたないことは、すでに自明のことなのである。

また、地球サミット以降に採択された重要な国際環境条約の一つにいわゆる生物多様性条約があるが、1993年に発効したこの条約のもっとも重要な業績の一つは、皮肉なことに「生物多様性は人類の共同の遺産であるという考えを拒否したこと」、つまり、「生物資源の国家主権を認めたことである」とされる [ブラウン 1995: 301]。自国の豊富な潜在的生物資源を商品化する技術や資本のない途上国が、資源の先進国の頭越しの占有的利用を危惧してのことである。地球は一つであるが、その地球にはさまざまな地域が、時には利害を対立させながら共存しているのである。

米本昌平の『地球環境問題とは何か』は、地球環境問題に潜む科学情報のいびつな肥大化や政治性にも深い洞察力を加えたすぐれた著作である。環境問題の政治構造については、冷戦終結を境に、力学の軸が東西から南北に移行したことを明らかにしている。この中で、環境問題を機に顕在化した新たな南北軸の従属構造に対する南からの反発を、米本は、インドの V. シヴァの論文を引用して例証している。長いがそのまま引用する。

「環境悪化を、グローバルな解決を必要とするグローバルな問題と主張することで、〈グローバルな権力〉は、地域の人々が依拠している環境の破壊への自分たちの役割と責任を改竄してしまう。オゾン層破壊を例にあげると、その元凶であるフロンは、もともと特定

*3 環境問題についてはその二重構造を挙げておいたほうがよいだろう。すでに多くの人々が指摘するように、環境問題は「地球」環境問題と「地域」環境問題という二つの次元を含んでいる [たとえば中島 1997]。前者はオゾン層の破壊や CO₂ 排出という世界的な合意と取り組みが必要な問題であり、後者は、公害や湖沼の富栄養化、都市化に伴う乱開発といった地域に限定された問題とされる。そして、この「地域」環境問題は、公害がまさにそうであるように、自然条件ばかりでなく社会・経済・政治といった地域のさまざまな要因が関与し、その解決の糸口が地域研究に期待される場所にほかならない。しかしここで強調しておきたいのは、地域を越えた課題とされる「地球」環境問題についても、グローバルないし国際的な視点のみでは不十分であるという点である。

少数の工場で製造されたものであった。これをやめればいいのである。ところがこういう事実は都合よく忘れさられ、議論は、インドや中国の未来の世代の冷蔵庫やエアコンの使用という問題にすり替わってしまう。現在の問題を未来のものへ転換することで、北側は南側を支配する政治空間を獲得する。こうして〈グローバル〉という概念は、環境帝国主義の倫理的基盤を形づくる。生物多様性についても同様で、〈グローバル化〉という概念は、地域の権利を侵食し、生物資源についての支配とアクセスの権限を遺伝資源が多様な南側から遺伝資源の貧弱な北側へと移してしまう」「〈グローバル〉概念は構造化され、北側はすべての権利を獲得し責任を免除される一方で、南側は権利を失い、すべての責任を負わされる。〈グローバル・エコロジー〉とは結局、非倫理的なものに倫理的理屈をつけることである」[米本 1994：170-171]。

シヴァの主張は、環境問題の政治構造だけでなく、地球環境問題をグローバルに取り扱おうとすることの本質的欺瞞を見事に指摘していると思う。地球規模の問題と棚上げにし、環境問題を地域から引き剥がすことは、ゆがんだ近代化をいち早く推し進めた先進地域の責任逃れにすぎない。今日のグローバリゼーションの中では、どの地域における環境問題もその地域だけでの解決はできないのも現実であろう。にもかかわらず、それぞれの地域の固有の事情を把握した上で、それぞれの環境問題を解決する努力がまずなされなければ、グローバルな解決策の試行はいたずらに他の地域の反発を買うだけである。地域は固有の歴史と尊重されるべき将来を持っている。地球環境問題の中で鍵となるのはこうした地域と世界、ローカルなものと同グローバルなものとの共存をいかに図るかということである。環境問題の解決を模索するときに、「地域研究」をもちだす根拠はこのあたりにある。

III. 地域生態史の問題意識

「地域」への配慮なしでは、環境問題は解決できない。地域研究は環境問題を考える枠組みを提供するはずである。としても、「地域生態史」として、現代的課題である環境問題に歴史の視点を持ち込むことが、過去を反省的に振り返る以上に、なにをもたらし得るだろうか。

環境問題への社会的関心に呼応するように、既存の学問分野でも「環境」をその対象に取り込むようになってきている。思いつくまま挙げれば、環境経済学、環境社会学、環境教育学、環境倫理学、などがある。

おそらく、歴史学における同根の動きが、「生態史」あるいは「環境史」ということになるのだろう。歴史学の生態、環境、自然への接近は、たとえば『世界史への問い』と題されたシリーズの刊行にあたっての問題意識の筆頭に、「人間の諸活動は、場としての自然（環境）の中で営まれているが、大規模開発と産業化が生態系の破壊をひきおこしつつある現在、あらためて人間と自然との関係を歴史的に遡って見直す必要に迫られている」と記されていることから窺える [後藤 1989：1]。

歴史学者であるウィリアム・クロノンが『変貌する大地』を著したのはすでに古く1983

年のことである。クロノンは、アメリカ環境史学会（American Society for Environmental History）の重鎮であり、森林史学会（Forest History Society）と共同で編集にあたることになった環境史に関する学術機関雑誌『環境史（Environmental History）』の創刊号（1996）でも巻頭論文を任されている。

植民地時代のニューイングランドの生態の歴史を叙述した『変貌する大地』は、「環境史」の中でエポック・メイキングな作品といえるものである。文化の変化だけでなく、生態学の成果を積極的に援用し、生態面の変化を取り込んだ歴史研究の嚆矢でもある。また「生態的植民地化」という概念を基調としている点で、その後出版された、アルフレッド・クロスビーの「生態的帝国主義」（1986）の先駆をなすものといえる。このクロスビーの著作は、帝国主義という歴史の一時期とその時代の生態環境との関わりに着目し、ヨーロッパの生態支配を説得力のある歴史的事実で裏付けた著作であり、ジョン・マッケンジーの編集による『帝国主義と自然界』（1989）にも連なる。

歴史学による一連の生態史の試みは、環境問題がまさに現代的課題でありながら、過去にさかのぼるかたちで問題の所在を明らかにしなければならないことを再確認させてくれる。環境問題が歴史的課題であることについて矢野は、「環境問題と取り組むとき、過去にさかのぼって、事柄を歴史的にとらえてみる必要がある。そして、とくにヨーロッパの植民地支配が築き上げた人間と自然との関係に関する近代主義的な通念のことを、的確にわきまえることが大事である。いわば近代史の過程で、人間が自然にたいして尊大になったとき、環境問題の種がまかれたのだ」としているが[矢野 1993：237]、歴史学のこうした論文がその論拠となっている。

現代の環境問題の根元を「近代化」に求めることは、受け入れやすい考えであるが、さらにさかのぼって前近代、さらにそれ以前へとすすめ、人と自然の二律背反的ともいえる関係に論及する関連書が、森林問題とのからみで次々と出版されている。翻訳のあるものをいくつかあげると、ジョン・パーリンの『森と文明』（1994）、クライブ・ポンティングの『緑の世界史』（1994）、さらにはジャック・ウェストビー『森と人間の歴史』（1990）などがある。いずれも森林と人間の関係についての通史であり、森林と人の関わりの歴史に新たな光をあて、興味深い内容を含んでいる。

ところが、こうした広い意味の「生態史」「環境史」をよくよく読んでみても、今日の環境問題へいかなる方法と理論をもって迫るのか判然としないところがある。文明の盛衰と森林の関係やヨーロッパのイクスパンションのもたらした生態的重圧など、今後の人と自然の関わりのありかたについて示唆に富んだ指摘もないわけではない。また、歴史学が遠くに自然あるいは環境問題を意識した分析を加え始めたことはたいそう心強いことである。実際、先に挙げた生態史の著作は、環境問題や森林破壊に対する危惧が執筆のきっかけとなったことが述べられている。にもかかわらず、歴史から学べるのは教訓だけなのか、と思わせるところがある。

「歴史学」的生態史に物足りなさを感じるのは、その問題意識にある。地域研究の問題

意識は錯綜する「現代の問題群」についていかなる解答をあたえるかということである。すぐに具体的な解答を得ようとするのではない。にしても、そこに解決を図ろうとする明確な意志がなければ、それは単に自然、あるいは環境を歴史学的視野の中で取り扱っただけでおわる。

地域研究は本来的に未来を語る学問である。「歴史学」的回顧に欠けているのは、この未来に向けた視点である。地域生態史が過去を振り返るのは、今日の現状、問題点を強く意識した結果であり、地域の将来のあるべき姿を模索することが目的にある。それぞれの地域の環境、人と自然のかかわりが危ういものになりつつあるのが現在の状況である。こうした現状をふまえ、地域の将来をどうするのかという鮮明な問題意識のうえに立ち、過去に洞察の源泉を求めるのが「地域生態史」といえる。

IV. 地域生態史の試み——泥炭湿地林

地域生態史の持つ将来に及ぶ問題意識について、自分自身の関心から事例を挙げておこう。スマトラの東岸に拡がる泥炭湿地林帯が対象である。

泥炭湿地林は熱帯林の中の一つの森林タイプである。泥炭は通常寒冷帯で生成されるが、熱帯地域でも過湿状態にあれば植物遺体の分解が押さえられ、泥炭が生じることがある。東南アジア島嶼部の低湿地帯に広く分布しているが、この熱帯泥炭上に成立した種組成や相観において特徴的な森林を泥炭湿地林と呼んでいる。

泥炭湿地林の生態史を概括してみる [阿部 1993]。泥炭湿地林は、ごく近年まで人の侵入を拒んできた森林である。高温多湿で過酷な環境がまず健康面で人の居住を許さなかったこともあるが、積極的に人をひきつける資源がなかったことも理由としてあげられる。いずれにせよ長く泥炭湿地林帯は「無主の地」として人の気配すらない森林であった。この森林に人影を見るのは19世紀の後半からである。まず当時急速に発展していたシンガポールの木材需要を満たすため、中国人の森林伐採労働者が森に入った。伐採労働者はそれでも、森林の景観を大きく変えることはなかった。むしろ、労働者の多くが、厳しい労働環境の中で栄養不足と病気で倒れていくことになる。

森林が目に見えるかたちで拓かれてゆくのは、今世紀に入ってからである。泥炭地は過剰な水分を排水すれば農地としての利用が可能になる。遠くボルネオ島やスラウェシ島から土地などの生産手段を持たない人が次々とこの無主の地に移住してくるようになった。パサン・スルット*4と呼ばれる排水路を要とする技術が泥炭湿地林を農地に変えてゆくのだ。移住者は労働力の許す限り森林を切り拓き、ココヤシを植えて行く。ココヤシはコブラにして販売する。自給的な農業でなく、最初から商品作物栽培を目的としている。小農

*4 パサン・スルット (Pasang Surut) はインドネシア語で潮の干満を意味している。潮汐灌漑と訳されることもあるが、海水と淡水の比重の差と潮の干満を利用して灌漑排水を行う技術である。灌漑は水稻を栽培する時に必要となるが、ココヤシの場合はむしろ排水が重要となる。

による一種のプランテーション農業である。伐採された木が横たわる開墾地も10年もすれば豊かなココヤシ園となる。森林を拓くのも水路を掘るのも、斧とクワを使っての人力のみである。厳しい環境の中で完成されたココヤシ園をみると、人の持つ能力のもっともすばらしい面の一つをみる思いがする。

しかしながらこのココヤシ園は持続的なものでない。泥炭上のココヤシ園はきわめて不安定なもので、やがて必ず収量は低下する。理由は二つある。一つは物理的な原因である。排水した泥炭は急激に緊縮する。そのため地盤沈下がおこり、ココヤシが根上がりしたり、河川の水が逆流しやすくなる。今一つには泥炭の持つ化学的特質である。泥炭は基本的に貧栄養、とくに植物の生長に必要な微量元素が不足している。微量元素の不足はたちまちココヤシの収量に影響してくる。とくに銅は不足がちで、早いもので植栽後3年で銅欠乏症の病徴を示すココヤシもある。貧栄養の泥炭上に樹高30メートルを越える森林が成立していたのは、長い年月をかけてのものとはいえ、奇跡のように思えるほどである。

実際、移住者への聞き取りを行ってみると、10～15年のサイクルで頻繁に移動を繰り返している [Abe 1997]。収量が低下したり、洪水の被害を受けたりして、ココヤシ園の放棄と移動を余儀なくされている。幸いにして、というべきなのだろうか、新たに拓くことが可能な泥炭湿地林はまだまだある。移住者は再び森林に斧を振るうことになるが、その移動の軌跡には再利用の困難な荒れ地を残すことになる。

その結果、この20年ほどの間の移入者の急増もあり、泥炭湿地林は加速度的に拓かれることになる。移住者は利益を追求する「近代的」な農民である。泥炭湿地林に愛着があるわけではない。泥炭湿地林は金儲けの場である。稼ぐだけ稼いで、別の地に移り住むのが常態である。ここでは人と自然の調和などという言葉がむなししいものに思えてくる。今日の商品経済社会と環境に関わる問題点が、「自然保護」「環境保全」「持続的農業」といった概念に包み隠されることなく、そのままさらけ出されている。

森林を切り拓く人々と寝食を共にし個人史の聞き取りを行う。その一方で、絶望的な思いでこの森林の行く末に思いを馳せることになる。これからどうするのか、どうすればよいのかが問われている。泥炭湿地林は、人との関係の歴史がきわめて短かったため、人と森林がむき出しのまま対峙することになった。環境問題の根底にあるものが容赦なく突きつけられている。その短い歴史を考えると、熱帯泥炭湿地林の地域生態史は、むしろ、これから書かれるべきものと思われてくる。地域生態史が将来を見通すものというのはこうした意味がある。

V. おわりに

地域研究のめざすところは、現代の問題群解決という応用的側面ばかりではない。手近なところから、学問としての地域研究の目的として掲げられたものを引用してみると、地域研究は、地域理解と世界認識であり [松原 1997]、そこから導かれるあらたな世界秩序の構築であり [高谷 1997]、近代化・合理化・産業化・経済発展をもたらした近代西洋科

学を見直し新たな知の枠組みの探求 [立本 1997] ということになる。

とはいえ、地域に拠って研究する者が、東南アジアや中国を広く逍遙し森林破壊の今日の状況について本能的危機感を持ったとき、あるいはアフリカやオセアニアの森の民とともに生活し生活基盤を奪われることの不安と怖れを共有したとき、きわめて現実的な課題である地域の環境問題を棚上げにはいかなる研究をも進めることは不可能である。

環境問題の解決策の模索が究極の目的にあるのだが、現代社会が突きつけるアポリアの一つである環境問題に簡単に答えが出せるとはもとより思っていない。「地域生態史」として自らの関わってきた地域の生態の歴史を謙虚に概観することで、問題の輪郭とその固有な課題を明確にし、あるべき将来像を描き出す一助にしたいのだ。

たとえば、歴史学は丹念に一次資料を検証してゆくし、人類学は、見聞きした「事実」の客観性にとことんまでこだわっている。個人的な感慨だが、インドネシア思想史の故土屋健治が、現地のアーカイブで埃まみれ汗まみれになりながら一次資料を探し求める「フィールドワーク」について語っていたことも思い起こされる。地域の生態の「総合」的理解も、地道な事実の集積の上に成されなければ皮相的なものになる。実証的なデータから帰納されたものこそが尊いと考えるのは、なにも自然科学者に限ったことではない。

幸いにして、生態あるいは風土というものは、それ自体が「総合」的なものである。現植物一つとってもさまざまな物理的・生物的環境要素の相互作用と進化的な時間の経過が総体として具現化したものにほかならない。自然科学者は、とりあえず目に見えるもので生態を推し量ることができる。だとすると、いま地域生態史で求められるものは、人と自然が歴史的に織りなした生態ないし風土を、つまり人が大地に刻み込んだものを真摯な目で読みとっていく作業であるかもしれない。

参考文献

阿部健一

1993 「スマトラ泥炭湿地林の近代一試論一」『東南アジア研究』30(3): 191-205

Abe, Ken-ichi

1997 *Cari Rezeki, Numpong, Siap: The Reclamation Process of Peat Swamp Forest in Riau* *Southeast Asian Studies* 34(4): 622-632

ブラウン, レスター・R

1995 「地球白書1995-96」澤村宏監訳 ダイアモンド社

(原著 Lester R. Brown, et al. 1995 *State of the World 1995* New York: W. W. Norton & Company, Inc.)

クロノン, ウィリアム

1995 「変貌する大地——インディアンと植民者の環境史」佐野敏行・藤田真理子訳 勁草書房
(原著 William Cronon 1983 *Changes in the Land: Indians, Colonists, and the Ecology of New England* New York: Farrar, Strus & Giroux Inc.)

後藤明ほか編集責任

1989 『シリーズ世界史への問い 1. 歴史における自然』岩波書店

原 洋之介

1995 「地域研究と経済学」重点領域研究「総合的地域研究」成果報告書シリーズ No. 6 京都大学東南アジア研究センター

川喜田二郎

- 1996 『川喜田二郎著作集 2. 地域の生態史』中央公論社（初出1989「環境と文化」河村武・高原栄重編『環境科学II 人間社会系』朝倉書店）

松原正毅

- 1997 「地域研究序説」『地域研究論集』1(1): 6-18

マッカーサー, ロバート・H.

- 1982 『地理生態学一種の分布にみられるパターン』巖俊一・大崎直太監訳 蒼樹書房
（原著 Robert H. MacArthur 1972 *Geographical Ecology: Patterns in the Distribution of Species* New York: Haper and Row, Inc.）

中島克己

- 1997 「地域環境問題の現状と対応」中島克己・林忠吉編著『地球環境問題を考える』1-27
ミネルヴァ書房

パーリン, ジョン

- 1994 「森と文明」安田喜憲・鶴見精二訳 晶文社
（原著 John Perlin 1989 *A Forest Journey: The Role of Wood in the Development of Civilization* New York: W. W. Norton & Company Inc.）

ポンティング, クライブ

- 1994 『緑の世界史（上）（下）』石弘之・京都大学環境史研究会訳 朝日選書
（原著 Clive Ponting 1991 *A Green History of the World* A. P. Watt Ltd.）

立本成文

- 1997 「地域研究の構図 名称にこだわって」『地域研究論集』1(1): 19-33

高谷好一

- 1997 「〈世界単位〉の考え方」『地域研究論集』1(1): 34-49

ウェストビー, ジャック

- 1990 『森と人間の歴史』熊崎実訳 築地書館
（原著 Jack Westoby 1989 *Intoroduction to World Forestry: People and their Trees* Oxford: Basil Blackwell Ltd.）

矢野暢

- 1993 『『未完の日程表』を問う』矢野暢編『講座現代の地域研究 4. 地域研究と「発展」の論理』弘文堂 215-247

米本昌平

- 1994 『地球環境問題とは何か』岩波新書